

第3回若者支援事業運営協議会（レジュメ）

1 ねらい

- ① オールの現状を委員に知っていただく機会とする。
- ② 前回論点と示された事項についてご意見をいただく。
- ③ 「集中改革」に伴い、改善すべき事項を洗い出し、方向性を整理する。

2 次第

(0) 施設見学 9:45~9:55

◎ 順路

5階 オープンスペース⇒音楽室⇒スタッフルーム⇒相談室⇒オールカフェ⇒4階 学習室

(1) 開会 10:00~10:05

- ① 課長あいさつ
- ② 日程説明（貝沼）

(2) 協議 10:05~11:55

ア 報告

(ア) 前々回（9月27日）の提案，疑義に対し、前回（12月7日）に回答した内容

（貝沼）10:05~* 資料は前回配布済み

a 広報活動，若者支援（理解）の輪

- ・リーフレット、インフォメーションカード作成配布 前回資料1
- ・若者支援者養成講座（10月2，3日） 前回資料2 チラシ，受講者数，アンケート結果
- ・若者支援協議会全体会 前回資料3 次第，要綱，関係機関

b スキルアップ

(a) スタッフ

- ・全体ミーティング（月1） *OJT
- ・スーパーバイズ研修（月1） 資料4 日程、取扱件数
- ・勉強会（月1） 資料4 期日、内容

(b) ユースアドバイザー 前回資料5 YA勤務表

- ・自主研修 前回資料6 研修日程
- ・若者支援養成講座 10月2，3日 前回資料2 要項、出席者数
- ・若者支援協議会全体会 運営委員長出席 前回資料3 レジュメ、要綱、関係機関

c アウトリーチ 前回資料7 相談窓口の流れ

d 利用者の声 前回資料8 アンケート結果

(イ) 前回の論点の要旨 （貝沼）10:10~10:15 別紙資料

- a 相談員の現状、YAの現状
- b 利用者にとってのハードルの高低
- c 「居場所」の存在意義
- d 利用者自身のスキルアップの場
- e 活動の評価
- f 他機関との連携
- g 広報活動
- h 同行、伴走型

イ 「集中改革」について（貝沼）10：15～

（ア）経緯 令和元年より、効率性の高い業務への転換を図る目的で、業務を見直し、経費削減や民間委託（指定管理）も含め、集中的に改革を進めることが各課で行われた。

（イ）見直し

- 令和2年 他都道府県、政令市の調査
- 令和3年 臨床心理士を採用しての検証
- 令和4年 方向性の決定
- 令和5年 業者選定
- 令和6年 委託開始

（ウ）議論の前提として

- ・サービス低下になっては、本末転倒である。
- ・業務の見直しは、常に行わなければならない。
- ・民間委託ありきの議論ではない。
- ・業務の充実には、何が必要なのかを考えるべきである。
- ・民間委託することで充実することは何か。
- ・直営でのメリットは何か。
- ・「オール」の存在意義（立ち位置）を考える。
- ・新潟市の若者支援全体という視野に立って考える。

ウ 議論のポイント（貝沼）～10：20

- ・オールの3本柱「相談窓口」「居場所」「支援事業」それぞれの改善
- ・オールの3本柱「相談窓口」「居場所」「支援事業」の連携の改善
- ・集中改革の方向性

エ 現状説明（板垣、近）10：20～10：35

- ・「相談窓口」「居場所」「支援事業」の連携の実態
- ・プロジェクト会議（業務改善のオール内の会議）の状況

オ 懇談 10：35～11：55

【前回（12月7日）の論旨】

a 相談員の現状、YAの現状

- 高い志あり
- 向上心あり
- 相談員の専門性の必要性
 - ・精神医学や福祉、法律的な知識、家族歴など環境の分析、社会資源の活用（社会福祉士的な知識技能）
 - ・カウンセリング技能
 - ・分析、見立て、立案能力
- YAの対応の多様化（難しさ）
 - ・不特定多数の方と対応する
 - ・利用者（若者）の状況の変化（発達障がい、境界上、捉えに偏りのある方）
 - ・初対面の利用者と接する
 - ・一定の距離感を保つのが難しい（熱意を持てば持つほど難しい）
 - ・アドバイスしようにも正解がない。（ケースバイケース）
- 相談員、YAスキルアップが必要（力量に差がある）
 - ・資格所有者の採用
 - ・資格取得を目指す
 - ・職員研修（ケース会議も含め）、外部研修の積極的な活用
 - ・フォローする体制
 - ・インターク後の相談担当の割振りを力量に合わせて適切にする。

b 利用者にとってのハードルの高低

- 社会経験を積む場として「居場所」は有効である
 - ・社会には、いろいろな人がいて嫌なことがあることを学ぶ場である。
 - ・社会と馴染むためには自分の変化が必要となり、工夫したら良くなり、集団に入っていける実感や安心感のある場である。
 - ・「居場所」の枠組みを緩く（ハードルを低く）設定してあるため利用しやすい。
- 初対面のYAと対応する
 - ・どのYAが対応するかは、その場で知ることになる。
 - ・深く個人的にYAと交流することは難しい。
- 場にそぐわない利用者がある
 - ・対象年齢以外の利用者
 - ・雰囲気を壊す（傍若無人：大声、粗暴、下ネタ、決めつけ）

c 「居場所」の存在意義

- 安心感のある「居場所」
 - ・病院でもない、作業所でもなくて、不登校などで人と触れ合うことのなかった誰でも利用できる場である。
 - ・病院から紹介されてきている場合は、それほど重症の方ではないはず。

d 利用者自身のスキルアップの場

- ミニ講座、支援事業
 - ・アイロンビーズ、イラスト制作など自分でメニューを見て参加を決める。
 - ・スタッフから勧めることをとじて、会話ができる。
 - ・若者同士がつながるきっかけとなる。
 - ・若者全体が経験不足の傾向の中、利用者は特に少ない。
 - ・社会経験はPCや本では身につかない。作業や制作を通すことで、身につける場として有効である。
- ボランティア事業（児童クラブ、図書館）
 - ・参加率が高い
 - ・やりがいを見出す
- 専門性と事故対応
 - ・特性の強い方の場合、対応に困ってしまう場合がある。
 - ・専門職ではないため、事故が起きた時の対応が難しい。

e 活動の評価

- YAの活動の評価が難しい
 - ・若者の満足度を把握するのが難しい。

f 他機関との連携

- ★社会福祉協議会の共生社会プログラムに共同で取り組めないか（アルビの試合時にボランティアでゴミ拾いをしている）
- ★引きこもりセンターの利用者がオールの「居場所」を利用する流れはできないか。
- ★リファー先にスタッフが同伴することはできないか。
- ★スクールカウンセラー（特に県立）との連携ができないか。

g 広報活動

- リーフレットの配布の工夫
 - ・市内高校生（県立、市立、私立 計30校）、中3生徒、専門学校生に配布
 - ・対象者以外への周知を図る。（受け皿の存在を広報する）
- 女性へのアプローチは？
- スクールカウンセラー（特に県立高校）との連携が難しい。

h 同行、伴走型

- ★他機関への同行ができるといい
- 同行は、スタッフのマンパワーの問題があり、難しい。
 - ・関係機関からオールに来てもらってはどうか。
- 伴走型については、心は引き継がれている。
 - ・ハード面・・・ミニ講座、支援事業
 - ・ソフト面・・・相談や支援プランの充実